

1 研究の視点 教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫

2 本校の実態

5月に実施した「ふくしま情報モラル診断」の結果から、77%の生徒がスマートフォンを利用しており、55%の生徒が自分専用のスマートフォンを所持していることがわかった。また、平日勉強以外でインターネットを使用する時間は、3人に1人が3時間以上であり、ネット依存が深刻である。一方で、問題の正答率は7割に満たなく、学年が下がるにしたがって正答率が低い。

また、学校独自の実態調査から、特にLINEの利用が多く、誤解や相手意識の欠如等が原因となったLINEに関するトラブルも多数ある。ネット上でコミュニケーションを図る際に留意すべきことをあらためて考えさせていく必要がある。

3 実践事例

(1) 使用教材

今回使用した教材はLINE株式会社と静岡大学が共同開発したもので、情報社会に参画する力の基礎となるネットコミュニケーション・リテラシーを育てることを目的としたものである。5枚のカードを使い、自分の考えを可視化し、グループで比較することを通して、自分と他者との考え方の違いを実感することができる。また、どのような状況になるとトラブルにつながるかを考えることができる教材である。



(2) 実践内容

昨年度までの本校の課題から、ネット利用において自分と他者との違いからトラブルが起きる学習は行っているが、実生活での行動とすぐに結びつかないところもあるため、継続して取り組むことが必要であると考えている。そこで本時の授業では、カードの比較を通して友達の考えを理解したり、活動したことからのようなことがいえるかを考えたりする対話の部分に重点をおく。互いの意見を交わすことで、他者との違いや考え方に触れる時間づくり、そこでの経験が実際にネット上のコミュニケーションの気遣いや表現の工夫につなげることを目的とした。また、情報モラル教育において「保護者との連携」が課題としてあげられる。本時は授業参観の機会に授業を実施し、以下に示した取組を行った。保護者も一緒に、ネット上でのよりよいコミュニケーションの在り方を考える機会となるようにしたい。



【保護者との連携に向けた本時の取組】

生徒が授業で使用するワークシートとカードを保護者に配布し、保護者も授業に参加できるようにした。また、保護者に生徒の授業での学びを直に感じてもらうため、教室前の廊下にモニターを置き、生徒たちのカードの結果を確認することができるようにした。

授業後には、保護者を対象とした静岡大学の教授の講演会を実施し、情報モラルへの理解を深める機会を設定した。今後の情報モラル教育を進める資料として、Google フォームにより事後アンケートを行い参観した保護者の感想を集約した。



4 成果

アンケートを活用して、教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行うことで情報モラルに関する課題を把握することができた。また全校生徒で交流しながら、課題解決を目指すことができた。また、授業参観、保護者向けの講演会を行ったことで、保護者の情報モラルへの関心が高めることができ、家庭でのネットの使い方について関心を持たせることができた。

I C Tを用いて学年を交えて意見を交換することで、学年ごとの考え方の違いや新しい気づきを得ることで、よりよいネットのコミュニケーションについて考えることができた。

4.「楽しいコミュニケーション」をしていくために、これからどんなことを考えればよいかな？

相手と自分のせめてイヤなことを教え合って、そのよう なことはもうしないうように気をつける。

4.「楽しいコミュニケーション」をしていくために、これからどんなことを考えればよいかな？

人の気持ちを考え、楽しいコミュニケーションをする。
嫌な事を言っても相手が傷ついたり、相手がよこす方が相対、自分も楽しいと思います。

4.「楽しいコミュニケーション」をしていくために、これからどんなことを考えればよいかな？

相手が傷つくなと思うことを言わないようにすればいいと思います。
スタンプや絵文字なども使って「誤解」をされないようにした方がいいと思いました。

5 課題

自分事として捉えさせるために事例等を紹介するだけでなく、生徒がより自分事として捉えるために工夫していくと良い。また、より保護者へのネットのコミュニケーションへの理解を深めてもらうために、保護者参加型の情報モラル教育を実施していく必要がある。昨年度の取組から、一回限りの授業では、効果が出ないことがわかっているため、定期的に今回のような情報モラル教育を行っていく必要がある。

中教研相双支部特別活動部会 1次研資料

相馬市立中村第一中学校

1 研究主題と副主題

研究主題 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。

研究副主題 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

2 研究の視点 ※相双支部研究推進計画より

- ① 生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫
- ② 教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫
- ③ 集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫

3 研究実践

① 生徒会活動

計9つの専門委員会と生徒会執行部で構成される。

専門委員会は、毎月1度開かれ、月の活動を振り返ったり、来月の活動予定を確認したりする。委員会ごとに、委員長が話し合いを進め、子供たちが主体となるように指導をしている。

【研究の視点②】

今年度は、「活動の振り返り」に力を入れており、反省を生かした取り組みが各委員会で行われている。具体的には、あいさつ運動の見直し（生徒会執行部）、遅刻者をなくす取り組み（代表委員）など、課題に目を向け、改善に向けた話し合いが行われている。話し合いで出た内容を実践し、その結果どう変化したかを次の委員会で確認するというサイクルができてきた。

<新聞委員会での取り組み>

新聞委員は、「しっかり読んでもらいたい」という気持ちで学級新聞を作成している。しかし、多くの生徒が「読む」ことに苦手意識をもっている。そこで、新聞委員が毎週木曜日に「読み方レスキュー(正進社のテキスト)」を行うことで、「読む」ことに対して自信が持てるようにしようと取り組んでいる。



【研究の視点③】

コロナが収まってきたことにより、全校生で集まる機会が増えてきた。ここ数年、放送という形で行ってきた行事をもとの形に戻している最中である。

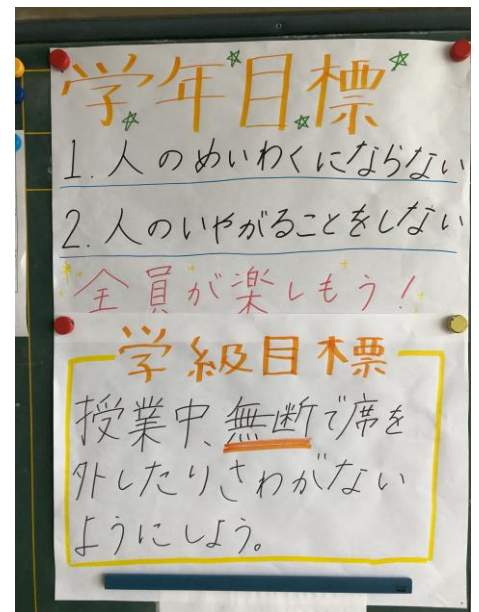
そこで、全校生が集まる行事（対面式や壮行会など）に関して、生徒会執行部が事前に打ち合わせを行い、当日に生徒同士の判断で運営ができるように指導を行っている。会長を中心に、流れの確認を行うことで、様々な想定ができるようになり、自らの判断で少しずつ動けるようになってきた。

② 学級活動

< 1 学年の実践 > 【研究の視点②、③】

昼休みの廊下での過ごし方について、騒がしい、道をふさぐ、寝転がる、ふざけあいの延長の暴力行為などが見られたため、学年集会を行った後で、各クラスの学級委員長、副委員長を集め、昼休みを含めた普段の生活のあり方について話し合わせた。話し合いで出てきた意見をまとめ、各クラスの教室掲示とした。

学年を自分たちで良くしていくためにはという視点で話し合わせることで、リーダーとしての自覚を持たせるとともに、自身の行動を振り返り、今後の行動に責任を持たせる機会となった。



< 2 学年の実践 > 【研究の視点③】

学級委員長、副委員長に企画から運営を任せ、学年レクを実施した。学年レクを行う時間設定のみ教師側から提示し、行う種目や時間配分、進行など、生徒に考えさせ、その様子を見守り助言を行った。

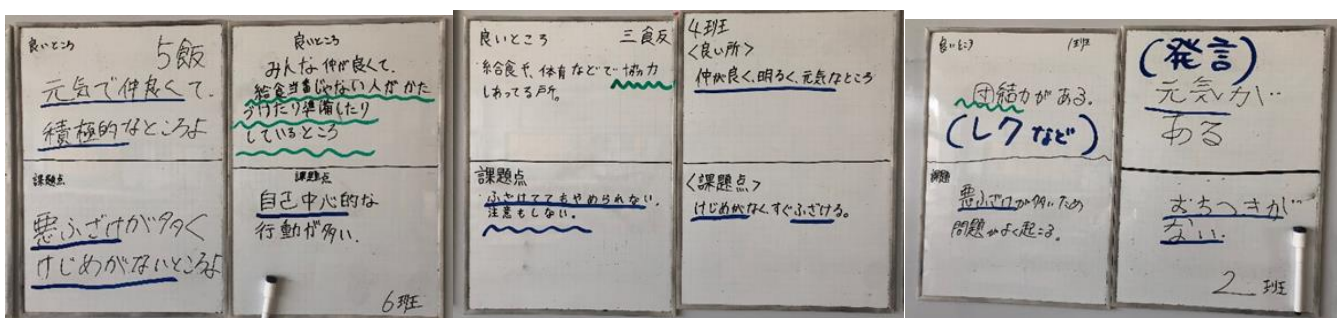
当日は天候が不安定で途中から雨が降ってしまった。校庭で行う種目があったが、時間配分を変更したり、種目の順番を変えたり、生徒同士で相談しながら、臨機応変に行動する姿が見られた。



< 3 学年の実践 > 【研究の視点①、②、③】

生徒が自分たちの学校生活を振り返り、学級の良いところと課題点を挙げ、よりよい学級にするための話し合いの場を持った。班ごとに話し合ったあと、学級委員が中心となって意見をまとめた。

良いところと課題を挙げるように指示をしたことで、学級の問題点だけでなく、お互いの良さにも目を向けるきっかけとなった。



◎研究主題	様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。
○研究副主題	集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

1 研究の視点

- (1) 生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫
→個人の活動、班活動、学級での活動、学級と学級をつないだ活動、全校生での活動…と範囲を広げ、自らの意見が集団においてどのように反映・変化するかを実感する活動。
- (2) 教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的として集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫
→学校生活の中から課題を見出し、よりよい学校生活のために意見を出し合い、解決しようとする活動の実践。

2 授業の実践

ファシリテーターから出された課題提示をもとに、情報モラルを守りながら、情報機器やインターネットを利用した生活をしていくにはどうすればよいか、ICTを活用し、全校生で考える全校生で考える学活の実践（指導案参照）。

これまでに行った全校一斉学活のテーマ

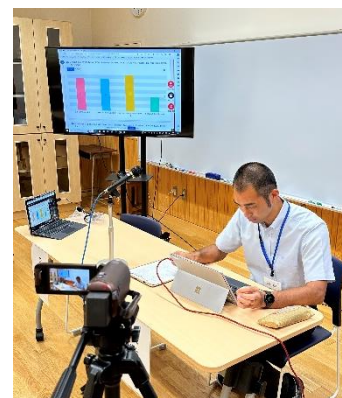
- 生徒会意見箱に投函された意見を学校生活に反映させるためにはどうすればよいか
- 物事を決める際に、誰もが納得できる方法にはどのようなものがあるか



学級での話し合いの様子



全校で意見を共有している様子



ファシリテーター

6 成果と課題

- 生徒の身近にある課題について考えを深めることができた。
- リアルタイムで個人や班、学級の意見を述べたり、他者や他の学級の意見を聞けることによって、新たな気づきがあったり、考えが変わったりして、課題を解決しようとする生徒の姿が多くみられた。
- 班活動や、学級と学級のつながり、全校がつながることにより、個から集団への意見の広まりを実感するとともに、課題解決に自らが関わる体験をすることができた。
- △教師主導での学活であったため、生徒会活動など、生徒主体の活動にこの形を取り入れるためには準備が必要。

学級活動（全校一斉学級活動） 学習指導案

令和5年7月11日（火） 第5校時
場所：ICT室（ファシリテーター）、各教室（担任、生徒）
指導者：ファシリテーター、各担任

1 題材名：「情報モラル」

2) 適応と成長および健康安全 エ心身共に健康で安全な生活態度や習慣の形成

2 題材設定の理由

（1）題材観

近年の目覚ましい情報技術の発展により、だれでも手軽にインターネットを通じて世界の人々と交流できるようになった。それにより、様々な映像や音楽、文章などで情報を得るだけでなく、情報の発信者として自分を表現できるようになっている。しかし、中学生の成長段階では、情報の取り扱いに関する知識が未熟であったり、他人との意識の違いを考慮せずに情報を発信してしまったりと、事件や事故になる危険性を把握できないまま使用している状態である。本時の学習を通して、情報モラルについて考え、これからの情報社会で身につけるべき能力について考えながら生活していく力を身につけさせたい。

（2）生徒観

学校生活では、大半の生徒が学校のルールを守って生活しており、落ち着いた雰囲気ができている。その一方で、情報機器やインターネットの誤った利用によるトラブルが発生しており、情報機器の利用に仕方については情報モラルについて考え、ルールを守り使用しているとは言えない状況である。現在、ほとんどの生徒が自分専用のインターネットにつながる端末を所持している。また、家庭でのルール作りが明確になっていない家庭も多く見られ、利用時間も長く、メディアに依存している生徒は多く存在する。

（3）指導観

本時は、情報が拡散される恐ろしさや、1人1人のとらえかたに差があること、情報機器やインターネットの利用についてのルールを守ることが大切であることを考えさせたい。また、グループ活動や対話を通して、他者との比較をする機会をもうけることで、自分本位の考え方で行動するのではなく、周囲の事を考えモラルを持ち行動する大切さにも気づかせていきたい。そのために、ロイロノートを利用し、意見や考え方を可視化しながら多様な考えに触れる機会を設け、全校生で話し合いを通して結論を出すことで、情報モラル意識を育成したい。

3 指導計画・評価規準（総時数1時間）

時間	学習内容	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 (本時)	情報機器やインターネットを利用することで起こるトラブルに巻き込まれる危険性について学ぶ。	情報機器やインターネットを利用した際のトラブルの種類や、それに関わってしまうときの思考パターンや行動原理について知る。	事件や事故に巻き込まれないために、自分で出来ることについて考える。また、他人との意見の相違を受け入れ、共生していくために必要な解決策を考え、表現する。	本時の学習内容を、自分事として考え、安全な生活を構築しようとしている。

4 本時のねらい

利用者全員が、情報モラルを守りながら、情報機器やインターネットを利用した生活をしていくにはどうすればよいか考え、表現することができる。

5 準備物

・タブレット端末（Googlemeet、ロイロノート） ・ワークシート

6 学習過程

段階	学習活動・内容	時間	形態	○教師の支援（主題・副主題との関連） ■ICTを活用する手立て評価（方法） 《各教室での担任の役割》
活動の開始	1 課題を把握する。 (1) 本校の現状を把握する。 (2) 本時の課題を把握する。 みんなが早く、情報機器やインターネットを利用した生活をしていくには何に気を付ければよいか。	3 2	鉦 鉦	○ 事前アンケートの結果をもとに、自分たちの身の回りには情報機器があるのが当たり前になっていることを伝える。 ○ SNS 等で情報の発信者側となったときのトラブル等を想起させ、安全な使用についての意識を高める。 ○ ロイロノートの画面配信の機能を使いながら、ことばと文字で情報を伝える。 《めあてを WB に書き、確認させる。》
活動の展開	2 課題を解決する。 (1) 例として提示された 1 枚の写真を、公開してよいかどうか話し合う。 (2) ロイロノートでカードを受け取り、カード内の写真について、公開するのに問題があるかどうか話し合う。 (3) 全校の意見を知り、自分たちの考えと比較する。 (4) 自分たちのグループの意見を再検討し、必要があれば修正を図る。 (5) 生徒同士で意見交換をし、他者の考えを知る。	3 6 6 5 10	班 班 班 班 鉦	○ この 1 枚は明らかに公開できないものを準備し、カードの操作や話し合いのデモンストレーションとする。 《「1. 4 枚の写真を振り分けよう」を板書する》 ○ ロイロノートで配信されたカードを操作させながら、グループで話し合わせる。 ○ グループ内で意見の相違を体験させ、さらに、提出箱で集めた意見を共有することで、他グループとの差異を感じ取らせる。 ■ グループ活動や、ロイロノートの提出箱の機能を活用した全校の意見の共有をすることで、他者との意識の違いを確認できるようにする。（手立て 1） 《「2. 意見を再検討し、必要があれば修正しよう」を板書する》 ■ 他のグループの意見と比較し、自分たちで一度結論づけた意見を再検討することで学習内容について、より深く考えることができるようにする。（手立て 2） 《意見を発表したい班があれば、Googlemeet のスタンプで矢吹まで知らせる》 《生徒発表時のみ、音声・映像の通信をオンにし、Googlemeet で対話ができるよう機材の操作をする》
活動のまとめ	3 本時をふり返りまとめを行う。 (1) 本時のまとめをワークシートに記入する。 インターネット上に写真など個人情報になりうるものをのせる時は、個々の受けとりかたが異なることを考えなければならない。 (2) 学級内で意見を発表し、本日の授業を振り返る。	10 5	個 学級	《本時で感じた他者との意見の相違を踏まえながら、自分の考えをワークシートに整理させる。》 情報モラルを守りながら、情報機器やインターネットを利用した生活をしていくにはどうすればよいか考え、表現することができる。（ワークシート） 《本時の内容を自分事としてとらえ、これからも様々なトラブルに巻き込まれないように、もしくは対処できるように、意識を高めさせる。》

令和5年度中教研相馬支部第一次研究協議会【特活部会】資料

相馬市立向陽中学校

- 研究主題** 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。
- 研究副主題** 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

本校の実践

1 生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫

○ 学級活動での活動内容の工夫

私の四面鏡

私の四面鏡 ワークシート①	
わたしから見た	わたしから見た
1 何でもできそうな	28 意志の強い
2 頭の良さそう	29 味のある
3 ものわりのよい	
4 知的な	
5 しっかりしている	
6 頼りになる	
7 信念のある	
8 責任感のある	
9 堂々たる	

自己理解と他者理解を深めつつ、所属感や自己肯定感を高めるための取り組みとして実施している。振り返りでも肯定的な意見が多い。

ありがとうの伝え合い

【 】さんへありがとう!! 2022年7月15日(金)
～1学期と一緒に過ごした2年3組のみんなに感謝の気持ちを伝えよう!～

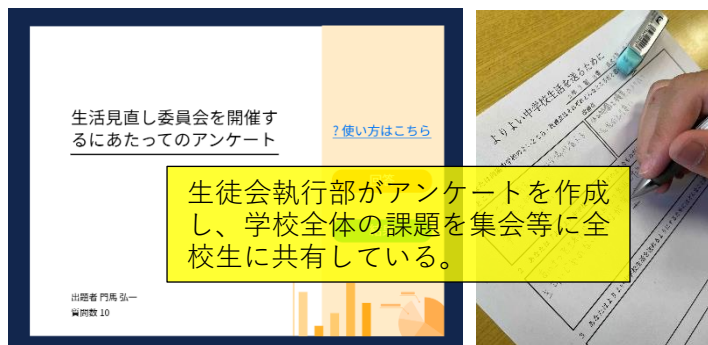
	より
	より
	より
	より
	より
	より
	より

○ 委員会活動・係活動の充実

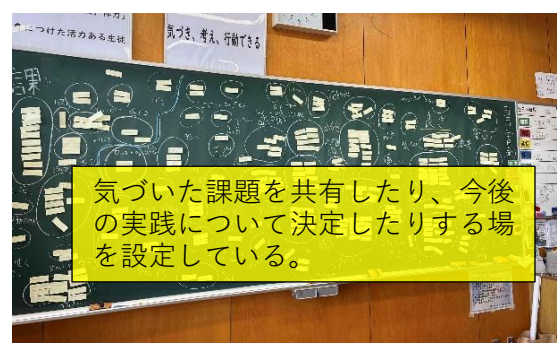
2 教師だけでなく生徒とともに所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫

○ 集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げていく工夫

スマホアンケート・学校のきまり等のアンケート実施



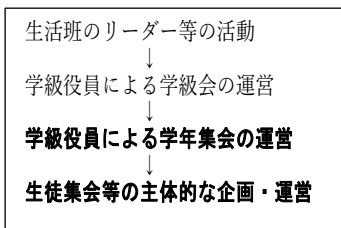
学級について話し合う場の設定



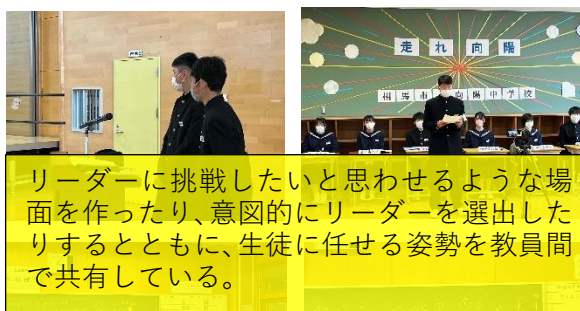
3 集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫

○ リーダー育成のための活動の工夫

リーダーの活躍の場の設定



活動内容に応じた意図的なリーダー選出



生徒に任せる姿勢の共有



研究主題 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を創ろうとする生徒を育む指導はどうすればよいか。

研究副主題 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

研究の進め方

- ①生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫
 - ・異学年間交流活動の実践 ・掲示板での情報発信
- ②教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫
 - ・学校生活アンケートの実施、集計、授業実践 ・学校行事や専門委員会活動の精選
- ③集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫
 - ・各行事の運営形態、係分担の工夫（どの場面でのどの生徒をリーダーとするか）

<1 学期の実践事例>

○小中合同運動会

3年生の体育係が実行委員長（リーダー）となって集団活動に取り組んだ。また、中学生がリーダーとなって、小学生と共に係活動に取り組んだ。【①+③】



○生徒会本部による掲示板での情報発信

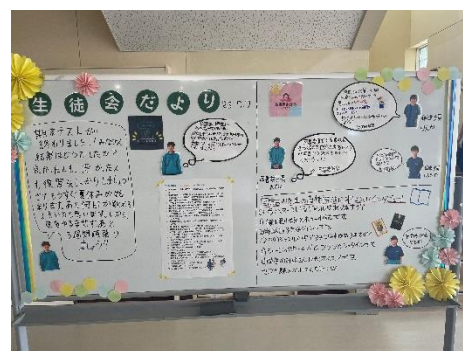
生徒会スローガン「千紫万紅～描け22人のカラー～」にちなんだ掲示を全校生で制作している。また、生徒会だよりをホワイトボードに作成し、各部・各委員会のリーダーからの呼びかけを行う場、生徒会役員による生徒・先生方へのインタビューを掲示する場となっている。来校した方に見ていただき、学校便りで保護者や地域にも発信している。【①+③】

○各行事での縦割り班編制

・全校集会では、生徒会本部主催の全校レクを実施しており、生徒会役員が縦割りで班編制をしている。学年関係なく意見を出し合いながら、1人ひとりが積極的にレクに取り組む姿が見られる。

・スマホ安全教室では、縦割りの4人班でスマホの使用状況や改善点を話し合った。

→本校ではさまざまな行事で縦割り班を編制するため、3年生が中心となってスムーズに話し合いを行うことができる。【①+③】



<2 次研に向けて>

本校は生徒と教師の距離が近く、学校生活全般において教師の手厚いフォローが受けられるため、生徒の学校生活に対する満足度も高い。その反面、学校生活への課題意識が薄いこと、自分たちで課題解決していこうという意志が弱いことが本校の特別活動における課題とも言える。そこで、生徒・教師向けに学校生活改善アンケートをとったり、卒業生向けに中学校生活と高校生活のギャップについてアンケートをとることで、小規模校ならではの課題を見出し、当事者意識を持って課題解決に向けた活動を取り入れていきたいと考えている。【②+③】

令和5年度 中教研特別活動部会 第1次研究協議会資料

南相馬市立原町第一中学校

1. 研究主題・副主題

- ◎研究主題 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。
- 研究副主題 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

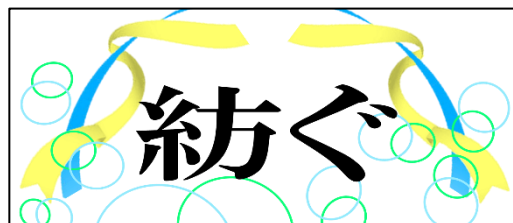
2. 研究の視点 ※相双支部研究推進計画より

- ①生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫
- ②教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫
- ③集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫

3. 原町第一中学校の実践

I. 本年度の生徒会テーマ「紡ぐ（つむぐ）」

生徒間、学級間、学年間、学校間、生徒一教師間、学校一保護者、学校一地域間、をつなぐなど、それぞれだけの活動だけでなく、各グループ間をつないでの活動を行える生徒会でありたい。という思いからこのテーマが設定された。このテーマをもとに、生徒会活動を実施している。また執行部の活動としても、執行部を各委員会の話し合いの場に執行部が見学に参加し、意見を集約したし、意見を述べたりし、委員会と執行部のつながりをつくる第一歩とした。【視点③】



II. 応援団の再結成

コロナのため、3年間以上応援団の活動がなく、事実上廃団してしまった応援団であるが、生徒会が中心となり、応援団の再結成を行った。各部活や学校代表として対外行事に参加する生徒を応援すべく、学級の人数にとらわれず、1～3年生に有志で募集をし、総勢42名の団員での結成を行った。有志で集めたこともあり、目的意識の高い生徒が集まり、活発に活動できている。【視点①】



Ⅲ. グリーンカーテンプロジェクト

生徒－保護者間、学校－地域間をつなぐために、新たなプロジェクトを実施。フウセンカヅラを育て、全校生徒と保護者（PTA）での活動としていく。SDGs や福島ゼロカーボン宣言とも合わせて実施ができればと検討中。

～流れ～

種まき（3年生）⇒夏休みの水やり（運動部の1,2年生）⇒収穫（1・2年生）⇒袋詰め（PTA）⇒袋の中に入れるメッセージカード（全校生で文化祭の係活動として）⇒文化祭で保護者に配布。学校にきていただいた業者の方や地域の方に配布予定。



☆今年度収穫できた種。各学校でいかがですか？相双地区の各学校で実施したら、地域の中学校の取り組みとしても、良いのではないのでしょうか？

Ⅳ. 各学年での取り組み

① 1 学年・2 学年

●「中体連応援窓メッセージ」

1・2年生より中体連に向かう3年生へのメッセージを募集し、2年生の学級役員（長・副）が集まり、掲示メッセージを決定。その後、1・2年生の学級役員で窓に掲示。【視点③】



●学級活動の充実（2－2の例）

学級3役（委員長・副委員長・規律委員）が中心として学級会を運営し、学級の課題を解決するために話合いをした。今回は、学級生活の中で周りの人のことを考えて行動できていない現状。互いが声を掛け合うことができないで、クラスメイトが困っていても助けることができていないことが課題として挙がってきたために実施をした。最後は、「クラス全員が心から笑えるため」に自分自身は何をしなければならぬか、自分事としてとらえる視点まで考えさせた。【視点②】



②3 学年 「進路あれこれみんなで解決」

受験勉強に悩みを抱える3年生で実施。進路についての悩みをGoogleFormで集約。悩みの種類ごとに項目をわけ分類し、項目ごとに生徒が悩みに答えた。生徒同士で悩みを共有し、お互いに解決する方法を考えた。その結果を学級学年に掲示。進路通信にも掲載し保護者への共通理解も図った。【視点②】
進路のあれこれみんなで解決 (一部)

1. やる気・集中力について

- ・テストが近づいてもやる気がなかなか起きない
- ・勉強を真面目にしない自分に焦りを感じられない
- ・後回しにしてしまう癖があってなかなか治せないです
- ・やる気や集中力を高めるにはどうしたらいいですか

回答

- ・あとどれくらいなのか可視化する()
- ・意識を変えてみるのがやる気に繋がると思います。()
- ・高校に落ちた時のことを考える()
- ・カレンダー的なのをつくればいい()
- ・ちょっとずつ勉強時間を延ばしていった最終的に長時間勉強できる習慣を作るといいですよ。()
- ・親に言ってもらう()
- ・自分は音楽を聴いてやっているので音楽を聴きながらやってみるのも良いと思います()
- ・ワークなどで今日はここまでとか決めるとやる気が出る()
- ・図書館とかに携帯持たずに勉強道具持っていけばいいと思う()
- ・このままだと志望校に受からないという危機感を持つ()
- ・一日の初めに予定表を作ったり、時間を区切ってメリハリをつける()
- ・タイマーなどを使い時間を区切って休憩しながら勉強する()
- ・何かアイス🍦やお菓子系をご褒美にとっておいて宿題や勉強を先に終わらせてからにするといいと思います。そうすれば、楽しみも増えて勉強も捗るかと思います()
- ・人のものを真似するのではなく自分に合った方法を考えよう()
- ・タイマーで時間を測ってその時間だけしっかり集中すると決めて勉強すれば良いと思う()
- ・塾か図書館行く()・癖はそう簡単に治らないから少しずつ治してみる()
- ・スマホを親に没収してもらって使えない状況にする()
- ・無理に勉強せずちょっとずつやるのが大事だと思う。私の場合は、やるべき必要最低限のことと、ここまでやりたいという目標と、これで完璧という理想をまず考えて計画を自分の中で立てます。例えば、これをいつから始めていつ終わるのか？などです。狙うのは、ここまでやりたいという目標が余裕を持って完了できる(だいたい3日前)ところです。そして余った時間で完璧だと言える理想に向けて勉強するのが無理のない勉強です。()
- ・目標を立ててそれに達成したらご褒美があるといいと思う。()
- ・勉強する前に深呼吸をして頭を無にする()
- ・時間(30分、1時間など)を決めて、おやつや休憩をはさみながら焦らずにやる！()

令和5年度 中教研相双支部 第一次研究協議会 特別活動部会（資料）

南相馬市立原町第二中学校

1 研究の主題と副主題

研究主題 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。

研究副主題 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

2 研究の視点

- ① 生徒1人1人が集団の一員として行動し、集団の1人1人のよさを実感させる活動の工夫
- ② 教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫
- ③ 集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫

3 研究実践

（1）学級活動

視点①

- ・ 一人一人に役割をもたせ、仕事を任せる。上手い下手にかかわらず、役割を果たせば褒めることを徹底した。
- ・ 学期末の学習や生活についてアンケートで振り返る際に、お互いに成長した姿や頑張っていたことを教え合ってからアンケートに回答し、他者から見た自分のよさに気づかせた。

視点②

- ・ 各学級で1週間の生活から学級の課題を分析し、週末に生活委員会で集まり課題と来週の生活目標の確認を行った。

視点③

- ・ クラスにて課題が出てきたとき（整列、授業前着席）に、学級委員等に呼びかけをするように仕掛ける。呼びかけをしたら、「学級委員の指示に従おう」という方向でクラスを指導する。その後で個別に呼んで学級委員を褒める。学級委員等を立てあげながら、クラスを指導することができるため、生徒が学級委員の言うことを聞こうが聞かまいが、学級委員の肯定感を育てることができる。
- ・ 集会やレクリエーションを行う際には、できるだけ自分たちで企画や進行などの運営を行い、生徒主体で進められるようにした。

(2) 生徒会活動

視点②

- 委員会活動で、PDCA サイクルを意識させ実践させる。年度始めに月ごとの活動計画を作成し、月が終わるごとに反省を行う。反省はなるべく数値を使うようにし、そこからその月の成果や課題、改善策などを分析する。そこから「来月のアクションプラン」を作成し、次の活動に取り組む・・・といったサイクルを各委員会で自治的に行えるように指導を行った。

学校用紙 2021年度

() 委員会 前期活動

委員長	副委員長	1 年 () 組のメンバー
出立物等		

P 委員会の目的

本委員会は、

ために活動します。

P 本委員会が取り組むSDGs



見とれどと解とてどわ

↓

P 上の目的を達成するために、どんな活動をする？ (具体的にやることを書く)

活動事項	
------	--

月別計画と振り返り

D	C	E
	具体的内容	活動の振り返り
4 月		成果: 課題:
5 月		成果: 課題:
6 月		成果: 課題:
7 月		成果: 課題:
8 月		成果: 課題:
9 月		成果: 課題:

※各委員会ファイルにコピーしてください。

令和 2 年度 生徒会率任委員会の流れ

PDCA サイクルを意識 → どんどん良くなっていく委員会へ!

Plan (計画)・・・なんのために活動する？どんな活動をする？

Do (実行)・・・計画に基づいて、行動を行う。

Check (反省)・・・仕事をした結果、どうだった？課題は？成果は？

Action (良くなるための行動)・・・もっと良くなるために、しよう！

視点③

- リーダーに求められる素質としては、自分自信の判断力や統率力に関する自信(自己肯定感)とともに、「他(=集団)に興味をもつこと」も重要な要素であると考え。例えば、集団の課題に対して「自分にできることは何か」考える機会を与える。他・集団のために「自分が」できる行動を日常的に意識させることで、「人任せにしない」「自分事として捉えられる」態度を醸成することができる。
- 生徒会執行部では、学校の課題解決や学校行事の企画運営などで話し合いの場が必要になったとき、自分たちで会合の場を提案している。また自分たちで解決が困難なときには、各委員長に協力をお願いして、新たな解決方法などを発案していた。

1 研究主題・副主題

【研究主題】

様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。

【副主題】

集団活動への参画を通じて、課題を解決する力の育成

2 本校の教育目標・重点目標

＜教育目標＞ 自主・寛容・挑戦

＜重点目標＞ 目標の実現に向けて、自ら努力する生徒

3 特別活動の目標

- ◎ 自分で判断し、責任を持って行動できる態度を育成する。
- ◎ 他を思いやり、自己を見つめることができる態度を育成する。
- ◎ 集団の一員としての役割を自覚させ、協調する態度を育成する。

4 指導の方針

○ 自主（自ら進んで学ぶ生徒）

生徒の自主的、実践的な活動を助長し、自治的な能力の伸長を図るため、諸活動における生徒の活動場面の設定を工夫する。また、一人一人の生徒が自己の個性をよく理解し、自らの能力を伸ばし、生かそうとする能力と態度を育てる。

○ 寛容（明朗で思いやりのある生徒）

充実した学校生活の体験を通して、教師と生徒及び生徒相互の好ましい人間関係の醸成を図る。また、人間としてのよりよい生き方についての自覚を深めさせ、集団や社会の一員として互いに人格を尊重しあいながら協力して生きようとする態度を育てる。

○ 挑戦（健康でたくましい生徒）

望ましい集団活動を通して、生徒の心身の健全な発達を図るとともに、自ら自己を鍛錬しようとする自主的な態度を育てる。

5 内容別指導の重点

【学級活動】

- ① 学級生活に関する諸問題の解決とその過程を通して、集団としての連帯感を育成し、学級の志気を高める。
- ② 学級内の仕事の分担処理の活動を通して、リーダーを育成するとともに仲間意識を

盛り上げ、学校の望ましい風土作りをする。

- ③ 学校・学級の生活の充実を図り、学校生活の充実及び健康安全の態度や将来の適切な進路選択の態度を育成する。

【生徒会活動】

- ① 望ましい集団生活を適して、自立的な生活態度を養うとともに自治的・自発的な態度の育成を図る。
- ② 集団の一員としての自覚を高め、責任感、奉仕、共同の精神を養う。
- ③ 学校行事にできるだけ参加・協力させ、集団生活の経験を適して社会性を身につけさせる。

【学校行事】

- ① 生徒の積極的な参加と協力を図り、望ましい集団活動を通して、より大きな集団への所属感を培う。
- ② 学校生活に望ましい変化や折り目を付け、学校生活を豊かにするとともに心身の健全な発達を図る。
- ③ 自然体験や社会体験を充実させ、生徒の総合的かつ自主的な活動を通して、創造性や社会性を育てる。

4 活動内容

<学級活動>

体験学習、環境整備活動、新聞タイム、読書活動

<生徒会活動>

対面式、生徒会報支部委員会、各種壮行会、生徒会総会、生徒会役員立会演説会・選挙、スポーツ大会、緑化活動

<学校行事>

文化祭（燦稜祭）、芸術鑑賞教室、交通教室、避難訓練、防犯教室

研究主題	様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を創ろうとする生徒を育む指導はどうすればよいか。
副主題	集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成（令和5年度）

《研究の視点》	①生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫 ③集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫
---------	--

視点①について実践例

（1 学年）

実践内容 学級の実態に基づく席替えの可否の決定

授業実施に至る背景 期末テストが終わり、「席替えをしたい」という声が複数名から挙がってきた。だが、学級の現状(騒がしい、授業中に落ち着きがない等)に不満を持つ生徒がいるという話挙がっていることから、学級の現状を踏まえ、席替えをすることの可否を話し合わせることにした。

方法 ロイロノートでアンケート調査を実施し、その内容に基づき学級全体で討論を行う。

席替えを成功させよう 回答者数 25

グラフ 回答一覧

集計結果 作成者のみ閲覧可 回答者名 作成者だけに表示 ...

[1] 1学期中に席替えをするのが妥当である

棒グラフ 円グラフ

↓

回答	人数
Yes	21
No	3

[2] クラスの現状についてどう思いますか？

- ・よいところ
- ・改善が必要なところ

は何ですか？それぞれ記入して下さい

回答一覧

チャイムが鳴る2分ぐらい前に座ってない人がいると、座っている人が座るように声かけをしてくれるのがいいところ。

相手の気持ちを考えることが、改善すべきところだと思う。

元気で楽しく過ごしているのはいいと思う
元気づけてうるさくなるのは改善してほしい...

入学から2ヶ月を過ぎてベル着や、給食のボランティアなど自分達で協力して行動できるようになった。
しかし、授業中など場にふさわしくない行動・言動をしている人が多く見られる。目標に決めても守ることができない人がいるので、そこが改善点かなと思います。

《成果》

- ・ロイロノートのアンケートフォームの匿名性(教師のみ把握できる)を生かして、率直な意見を吸い上げ、討論に弾みをつけた。
- ・発言の難しい生徒でも、ICTを活用することにより、学級の一員であるという意識のもと活動に参加することができた。
- ・アンケートフォームを「改善点」にフォーカスせず「よいところ」にも目を向けさせることで、自分たちの良さの伸長を見据えた上で改善点を探ることができた。
- ・自分たちで決めた「改善点」を踏まえて席替えの実施を決定→自分たちの集団生活に責任を持つことにつながった。

視点①・③について実践例

（3 学年）

内容 ① 学年初めの学級づくり ～集団一人一人のよさを実感させる活動～
③ 学年後半の学級づくり ～生徒会、学級委員、係活動などのリーダー育成～

方法 学級の状況や行事などに合わせ、下記の道徳の教材を活用しながら学級活動を実施。

① クラス替え後の一人一人の居場所づくり、自己肯定感を高めることを目的にクラス全員の良いところを一人一人が全員分記入。リフレーミング辞典なども活用する。学級内に掲示する。

③ お互いの違いを認め合い、その上でぶつかり合った時にどのように意見を調整すればよいか話し合う。さまざまな「好き」「きらい」について伝えあい、否定しない受け止め方を考える。

～～道徳の授業との関連～～

新しい道徳3 ① 7 見方を変えれば ・ぼくにもこんな「よいところ」がある
(東京書籍) ③ 23 価値をめぐって ・しあわせ ・おたがいの「ちがひ」を認め合おう

《ワークシートの例》

Good things about everyone
～みんなのよいところ～ 2023. 5. 25.

3年2組 番 名前

●●●●	さん	●●●●	さん
●●●●	さん	●●●●	さん

＜例＞ **必ず全員の「よいところ」をかきましょう！**

やさしそう 笑顔がかわいい 運動神経がよい 頭がよい 発言力がすごい
字がきれい 読書好き おもしろい ユーモアがある ○○が印象的 走るのが速い
美しい ○○を頑張っている ○○に詳しい 英語が得意 発音が良い 音読が上手
かっこいい・・・ などなど自由に書きましょう！！

リフレーミング辞典

リフレーミングとは、「フレーム」をかけて見ることです。この辞典での「リフレーミング前」は「短所」と考えられる言葉に限りません。

リフレーミング前	リフレーミング後
1 失敗	挑戦の証
2 遅い	じっくり考える
3 失敗	挑戦の証
4 遅い	じっくり考える
5 失敗	挑戦の証
6 遅い	じっくり考える
7 失敗	挑戦の証
8 遅い	じっくり考える
9 失敗	挑戦の証
10 遅い	じっくり考える
11 失敗	挑戦の証
12 遅い	じっくり考える
13 失敗	挑戦の証
14 遅い	じっくり考える
15 失敗	挑戦の証
16 遅い	じっくり考える
17 失敗	挑戦の証
18 遅い	じっくり考える
19 失敗	挑戦の証
20 遅い	じっくり考える
21 失敗	挑戦の証
22 遅い	じっくり考える
23 失敗	挑戦の証
24 遅い	じっくり考える

《成果と課題》

- ・学級づくりの時期合わせて、目的を持って活動に取り組ませることにより、自己理解・他者理解を促進することができた。
- ・お互いのよさを認め合う活動はリーダーの育成にもつなげることもできる。
- ・相手の考えや自分との違いを肯定的に受け入れることはなかなか難しい。今後も相手の考えを好意的に受け止める活動や話し合いが滞ったときにどうすればよいか方法を考える活動を繰り返し、様々な課題を解決する力を育成したい。

視点③について実践例

生徒会総会議案書審議会 進行表【代表委員用】

議案書審議会は、生徒会の活動の一つです。
ですから、先生方の手を借りずに学級委員の方で会を進めてもらいます。
会がうまく進むかどうかは学級委員の力にかかっていますので、がんばってください。

チェック

1. 会が始まるまでに確認しておくこと

①明日の朝のうちに担任の先生に審議会を行うことを次のように話しておく。
『6校時目の学活で議案書の審議会を行うのでよろしくをお願いします。学級委員で進行しますが、審議会の途中でアドバイスがあればよろしくをお願いします。』

②進行の順序や役割分担を学級委員の間でしておく。

1. 議案書審議会の進行

①休み時間のうちに【生徒会総会議案書審議会】と黒板右に板書しておく。

②時間になったら ※別紙参照
「起立。これから議案書審議会を始めます。礼。着席。」

③議案書、質問・要望用紙を配布する。
「これから、議案書と質問・要望用紙を配布します。両方に名前を書いて下さい。」
「生徒会執行部の人たちが一生懸命に作った議案書ですから大切に扱って下さい。」
(全員が名前を書き終わったようなら、静かにさせて)
「5月16日に生徒会総会が行われます。この時間は生徒の意見を広くとり入れ、改善する機会です。よろしくお願いします。」

（全校生）

予報	部活動	部	図書	給食	保健	環境	放送	代表	執行部

議案書に目を通し、質問・要望用紙に記入したようなら、
見が済んだら黒板に記入してください。質問は白チョークで、意見は色チョークで記入してください。また、書いた文の最後に自分の名前を記入して書き終わったら、質問・意見用紙を教卓にあげていってください。
質問や要望が出ているときは、連名にする。
↑書いた人の名前の下に自分の名前を書かせる。
を絞る。
もらった質問、意見の中で、自分の所属する委員会についての質問に答えられる人はいれば、今答えて下さい。
※自分勝手な意見などは、学級委員が除外すること！

質問・要望に関して、答えられるものを答えてもらった人
「では、総会に出す質問・意見を確認します。まず質問は○○が出ました。意見は△△が出ました。この質問・意見は執行部に提出します。今学級で通った質問・意見を出してくれた人が、総会で質問・意見を述べようになりますので、今後、執行部から『質問者を聞く』という放送が入った場合には、忘れずに質問者会に出席するようにして下さい。」

《工夫した点》

- ・担任に頼らず、会が進行できるように事前に準備。
- ・個から小集団（グループ、学級）、全体への流れで考える時間を設定。
- ・小集団（学級）で解決する場を設定

《成果と課題》

- ・学級で解決する場面があるので、意見が出しやすく、生徒会に対する理解や参加意欲が高まった。
- ・今後は進行表を改善したり、一から作ったりするところから生徒が自主的に活動できるようにしていきたい。

- 1 研究主題 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。
副主題 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

2 本校の実態

- ・本校生徒の全体的な課題は『自己肯定感の低さ』にあります。約3年に渡るコロナ禍の影響は想像以上に大きく、教育現場における様々な場面、特に「意見交換・話し合い活動」「各種プレゼンテーション」「パフォーマンス〔運動・演奏・演劇〕」「交流・体験活動」において、コロナ禍以前は、学年の垣根を越えて概ね支障なく活動（表現）できていたとが、ここ数年の間に前述のような『自己肯定感の低さ』として表出している状況にあります。

3 実践事例

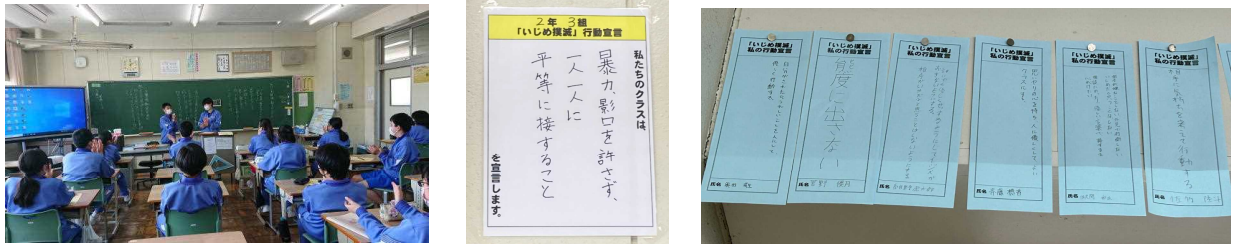
(1) 事例内容

本校では前述の実態を踏まえ、特に「相双支部研究推進計画」より＜研究の視点＞②について「関わり合い」を主眼に置き次の4項目の活動を実践しました。

《実践①》朝のあいさつ運動及び朝のメッセージ放送（全校生徒との関わり）



《実践②》いじめ撲滅を考える全校学級活動（全校生徒及びクラス内の関わり）



《実践③》向日葵プロジェクトポスター制作（他者への関わり：差別・偏見を無くす取り組み）



《実践④》相馬支援学校との交流活動（障がい者への関わり：合理的配慮・障がい理解事業）



(2) 成果

- ・上記4項目の実践及び体験を通して、生徒一人一人の表情が明るくなり、少しずつではあるが、発言や行動に自信や意欲が感じられるようになった。
- ・様々な「関わり合い」を通して、他者と自分との距離感や考え方、立場の違いについて考えようとする姿勢が感じられるようになった。

(3) 課題

- ・他者との「関わり」については徐々に意識化されているが、特にSNS上で「心ない言葉」を話し相手を傷つける行為が見受けられるため、情報モラル教育事業とも関連付けながら更に活動を推進していきたい。

令和5年度 中教研特別活動部会 第1次研究協議会資料

南相馬市立小高中学校

＜研究主題＞ 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。

＜研究副主題＞ 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

1 研究実践

○全校アンケートの実施

【視点①生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫】

小規模校のよさとして、生徒一人一人の意見が反映しやすいという点がある。ロイロノートを活用し、生徒会から全校生徒に対するアンケートを行えるようにした。その結果、文化祭や校則に関する様々なアンケートで提出された意見をもとに話し合うなど、生徒の主体的な活動を行うことができた。

○他校との交流

【視点②集団活動を通してリーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫】

東日本大震災以降交流を続けている県外の中学校とリモート会議形式で交流を行い。双方の学校の取り組みを紹介し合った。リモート会議では、発表する内容と役割分担のみを決め、なるべくアドリブに近い状態で交流をするよう働きかけた。その結果、お互いの趣味などを話し合い、打ち解ける様子が見られた。

○サイコロトーク

【視点①生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫】

SUGOROKU TALK						
Rules: ①サイコロを振る。出た目の数だけ進む。 ②止まったマスの特徴に答える。 ③どうしても答えない場合には「ノーコメント」OK。 ④ゴールはびったりのみ。						
最近笑ったのはどんなこと？	おとなりの人とジャンケンして勝てば2つ進む。負けたらストップ	今までに行った一番遠いところ	この間の週末にしたことは？	昨日の夕食は？	今朝何時に起きた？	START
今年頑張りたいこと	ラーメンは何ラーメンが好き？	友達を持ち物をひとつ返すよ！	ラッキー！1つ進む	結婚は何歳ごろがいい？	いつかやりたいこと	
海と山どちらが好き？理由も	結婚の条件	GOAL!!! 感想を教えて			将来の夢は？理由も	
好きな朝食は？	趣味を話してください	おとなりの人とジャンケンして勝てば2つ進む。負けたら2つ戻る	好きなタレントは？	この間の日曜日にしたことを教えてください。	残念！5個戻る	
欲しい能力は？	占い師が何でも教えてくれるとしたら？	明日が地球最後の日だったら？	目玉焼きには何をかける？	家族からよく言われること	ささやかな楽しみ	
					都会と田舎ならどっちがいい？理由も	

2 成果と課題

○全校アンケート等をきっかけに生徒会役員が主体的に活動するようになった。今後も、どんな学校にしたいかについて考えさせ、様々な活動を経験させることで、学校のリーダーとしての自覚がもてるよう、指導をしていきたい。

▲生徒会で実施した活動について、反省や振り返りの場面を設定することができなかった。活動後のアンケートを実施し、その結果を次の活動に生かすなど PDCA サイクルに取り組めるような支援をしていきたい。

なみえ創成中学校

1 研究の視点

- ①生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人の良さを実感させられる活動の工夫に焦点化を図った実践事例を提示する。

2 実践事例 「演劇ワークショップ」(総合的な学習の時間との教科横断的な実践) 学期ごと年3回実施 第1回 4月13日実施

中学生22名(1年生9名、2年生4名、3年生9名)参加

講師にPAVLIC3名とコーディネーター1名を迎えて実施

① 目的

演劇的な手法を取り入れたワークショップを通して、「自主性・表現力・発想力
感受性・社会性・まとめる力・チームワーク・協調性」など、生徒自ら考えてコミュニケーションしようとする能力を養う。特に第1回目のねらいは「演劇を通じて学校びらき 学年を超えた生徒同士の交流の機会を育む」「特に新入生や特別支援学級の生徒などコミュニケーションが苦手な生徒へ、演劇経験者である在校生が関わるきっかけづくり」

② 活動内容

I アイスブレイク

並び替えゲーム

(誕生日・氏名のあいうえお順
・好きな食べ物のあいうえお順)

仲間さがしゲーム

II 「ひらがな1文字」を当てる

ジェスチャーゲーム形式でのシーン創作

III 創作グループでの振り返り

③生徒の感想

「自分は人見知りだけど班のみんなと協力し、演劇を作ることができ、あまり恥ずかしがらずに発表することができた。」

「お題が「ば」で難しかったけど、みんなやファシリテーターの方々の力を借りてチームで劇を作り上げる楽しさにわくわくしました。」



3 実践を通して

○WS前後のアンケート結果では協調性 平均17.3→18.3

自己効力感平均15.4→17.1

とアップしており、効果的な活動であることがわかる。

●同様の活動を学校生活の中で計画し、実施していく必要がある。

教員のファシリテート力の育成。(今回教員研修も実施)

令和5年度 福島県中学校教育研究会相双支部第一次研究協議会
特別活動部会 事前提出資料

葛尾村立葛尾中学校

研究主題 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか
副主題 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

1 本校の現状

本校の生徒数は次のとおりである。

1 学年	2 学年	3 学年	合計
3 名 (男 1, 女 2)	1 名 (男 1, 女 0)	1 名 (男 0, 女 1)	5 名 (男 2, 女 3)

各教科、道徳、学級活動の時間は、学年（学級）ごとに授業を行っている。ただし、道徳の授業では「全校道徳」の時間を計画的に設定し、生徒同士の多様な考え方を交流させる工夫をしている。

一方、総合的な学習の時間は一緒に授業を行っており、全学年が協働して「ふるさと創造学」を進めている。また、毎日の短学活（朝、帰り）も全校生と全教員が集まって行っている。

本校生徒は、葛尾小学校と一緒に校舎で学校生活を送っている。また、校庭を挟んだ反対側には葛尾幼稚園があり、中学生、小学生、幼稚園児が同じ敷地内で生活している。

したがって、中学校、小学校、幼稚園が合同で行う行事が設定されている。

- ・運動会
- ・かつらおスクールフェスタ（学習発表会・文化祭）
- ・避難訓練
- ・花いっぱい運動 等

中学校、小学校が合同で行う活動も多い。

- ・入学式
- ・縦割り班清掃
- ・ボランティア活動
- ・サマーコンサート、クリスマスコンサート（音楽科の学習成果発表会）
- ・鑑賞教室 等

また、登下校のスクールバスも、生徒、児童、園児と一緒に乗車している。



【全校道徳】



【ASAKATSU】

2 研究実践

（1）生徒会活動

本校の生徒会組織は、右図のとおりである。執行部、奉仕部委員会とともに、少ない人数の中であっても、学校生活をより充実したものにするため、自主的・協働的な活動に取り組んでいる。

執行部は、毎月の「生徒会新聞」の発行や、月2回実施する「生徒会企画」（レクリエーションであったり、学習会であったり、事前に1年生からも意見を出してもらい、執行部の2人が企画・運

執行部	奉仕部委員会
会長（3年生）	委員長（1年生）
副会長（2年生）	委員（生徒全員）



【執行部による新入生教室の飾りつけ】

営する）などに取り組んでいる。また、「ふたば生徒会連合」をはじめとする対外活動においては、学校を代表して意見を述べるなどしている。

奉仕部委員会は、「健康的な学校生活を送る」を活動目標に、衛生検査や水道掃除、教室等の換気など、主に学習環境を整え、美化に努める活動に取り組んでいる。さらに、1学期末に行われた委員会では、「2学期は窓ふきやロッカー掃除にも取り組もう」など、学校生活における課題を見だし、解決していこうとする話し合いが行われた。



【衛生検査】



【水道掃除】

（２）生徒会総会

生徒会総会では、執行部、奉仕部委員会、部活動の各活動計画について質疑応答が行われるが、奉仕部委員会、部活動については全員の生徒が計画作りの話し合いに参加しているため、「質問、疑問がない」状態になる。したがって、総会では執行部がテーマを定め、全員で話し合う活動を取り入れている。5月に行った総会では、次のテーマが設定された。

- ・月2回行っている「生徒会企画」では、どんなことをやりたいか。

- ・「生徒会新聞」で“対話”につながるような内容はないか。

（本校の今年度の重点目標が「自分の考えを持ち、多様な対話を通して、自分の考えを深めよう」であることを受け、生徒会活動でもこの目標にむけた取り組みをすすめている）

これに対して全ての生徒が自分の考えを述べ、その後の活動に生かされている。

その他にも質問ではなく「〇〇ならば、もっと活動がしやすくなるのではないか」という提案型の発言が全体を占めた。

「少人数の中での生徒会活動を、どのようにすれば活気のあるものにできるか」という課題意識を全員が持ち、主体的に参加した生徒会総会であったと考える。



【生徒会総会】

（３）小中合同ボランティア活動

本校では中学校、小学校が合同で行う活動（学校行事）が多く設定されている。小中合同ボランティア活動もその一つであり、1学期は地域のごみ拾いとスクールバス清掃を行った。

計画の立案や事前の準備は教員が行ったが、開会行事や閉会行事を含め、当日の運営は生徒が行った。各班の班長は中学生が務め、小学生に声をかけながら活動を進める。当日は非常に暑い日だったが、途中で水分補給の時間を取るなど、小学生に対する心遣いがどの班でも見られた。活動後の後片付けも“中学生がやるのが当たり前”であり、どの生徒も自覚的に取り組んでいた。



【小中合同ボランティア活動】

3 リーダーの育成について

極少人数の本校においては、全ての生徒が主体性を発揮し、協働的に学校生活に関わらなければならない。したがって、指導者が集団の中から「リーダーを見い出す」必要はない。全ての生徒をリーダーとなるように育てなければならない。

一方、様々な活動を全校生が一緒に取り組んでいるため、常に下級生は上級生の姿から“上級生としてのあるべき姿”＝リーダー性を学んでいる。そして、自分も学年が上がったら同じようにリーダーとして行動しなければならないと思っている。

こうした極少人数の本校において、指導者として配慮、工夫すべき事項としては、①生徒自身がやることと指導者が援助することの割合、②生徒の主体性を引き出すための話し合い時間の十分な確保、③リーダーとなる場面の意図的な設定、等が考えられる。

令和5年度 福島県中学校教育研究会相双支部 第一次研究協議会 特別活動部会 提出資料

実践事例

(1) 幼・小・中ふれあい集会



(2) 清掃ボランティア



(3) 梅檀太鼓



(4) レゴシリアスプレイ



- (1) 毎年4月に実施している幼・小・中ふれあい集会は、学年・学校を越えた児童生徒の交流を図り、人間関係を深める行事である。
- (2) 本校仮設校舎は鮫川の近くにあり、毎年鮫川沿いのゴミ拾いボランティアを行っている。
- (3) 双葉町の伝統芸能である梅檀太鼓を未来に伝えていく機会として、毎年双葉町出身の指導者を呼び、体験をして、10月に行われる文化祭で披露をしている。
- (4) レゴシリアスプレイを通して、自分の考え・意見を表現する力を高める。

以上4つの実践事例は令和5年度の研究副主題である、「集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成」を実現させる活動であると考えます。(1)、(2)の活動は、学校や地域での活動に「自分事」として関わることで、集団の一員としての役割意識を高めることができ、研究の視点①に関連する。(3)の活動は、地域の伝統文化の継承を通し、地域社会への帰属意識を高める。(4)の活動は集団としての課題である表現力の向上をレゴというツールをいかして取り組んでおり、研究の視点②に関連する。

研究主題	様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか
副主題	集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

〈研究の視点〉②教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫

○生徒会説明会の実施

入学式翌日、中学校2、3年生から1年生に向けて生徒会説明会を行った。生徒会の組織や活動内容だけでなく、中学校での1日の流れや学校行事、部活動など幅広く説明を行った。生徒会説明会に向けて準備する中で、2、3年生は1年間の活動を振り返り、上級生としての自覚を高める機会になっていた。パワーポイントの資料を見せながら説明を行ったのだが、発表者ツールを用いて、教師が各スライドに台詞を書いておくことで、生徒が自信をもって発表することができるよう工夫した。



①生徒会説明会の様子

②生徒会説明会で使用したパワーポイントの一部

○生徒会専門委員会の実施

本校の生徒会活動は、4月～9月に活動する前期と10月～3月に活動する後期の二期制で行われている。前期であれば、4月上旬に前期の活動目標や活動内容を決め、9月下旬に前期活動の振り返りを行うことに加え、6月下旬に活動の見直しを行っている。生徒自身で4月に計画した活動を実際に行うことができているか振り返り、改善策を見いだしたり、活動内容を変更したりすることができている。課題の設定→解決に向けての話し合い→解決方法の決定→実践→振り返りを行う期間を短くすることで、現状にあった活動を行えるようにし、集団をよりよくする意識を高めている。

前期		後期	
課題の設定	課題の設定	課題の設定	課題の設定
解決に向けての話し合い	解決に向けての話し合い	解決に向けての話し合い	解決に向けての話し合い
解決方法の決定	解決方法の決定	解決方法の決定	解決方法の決定
実践	実践	実践	実践
振り返り	振り返り	振り返り	振り返り
4月	6月	10月	12月 3月

○SDGs ウィーク

令和4年度は「エコウィーク」と称して「節電・節水」を呼びかける活動を生徒会評議委員会と児童会でやっていった。しかし、「エコ」では環境問題に関する活動しか取り組めないという反省が出たため、令和5年度は学校の課題も幅広く解決に向かうことができるよう「SDGs ウィーク」と改称した。1学期は前年度の活動に付け加え、節電・節水はSDGsの6番目、7番目の目標と関連があることも呼びかけた。しかし、呼びかけの活動を行ったことで節電・節水ができていたのか結果を確認できていないこと、呼びかけの仕方はよい状態であるか評価ができていないことが課題としてあげられた。現在は3チームに分かれて呼びかけを行っているが、次回9月に行うSDGs ウィークでは、2チームで呼びかけを行い、1チームは呼びかけの評価を行う予定である。また、生徒が学校の課題としてあげた「物を大切にできていない」という課題を解決すべく、物の大切さを呼びかける予定である。



③SDGs ウィークに向けたポスター作成



④SDGs ウィークの様子

令和5年度 特別活動実践報告

檜葉町立檜葉中学校

研究主題 様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒をはぐくむ指導はどうすればよいか。

副 主 題 集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

実践内容 『生徒会主催による全校レクリエーション（ドッジボール）』

○取組のねらい

- ・全校生の絆を深め、諸活動へ積極的に参加しようとする態度を育てる。

○取組の具体的内容

- ・生徒会本部役員が、種目の選定や実施方法、ルール等を主体的に立案した。
- ・生徒会本部役員から各専門委員会へ水分補給の呼びかけや試合実況等の仕事を依頼した。
- ・学年対抗でドッジボールを行い、優勝チームが教員チームと対戦した。

○取組の課題・創意工夫

- ・各専門委員会へ協力を依頼することで、全校生で全校レクリエーションを作り上げることを意識させた。
- ・実施方法やルール等を決める中で、生徒が主体的に話し合うことができるよう、見守る指導を行った。

○取組の成果

- ・生徒会本部役員が競技方法等を話し合う過程で、公平にどの学年も楽しむことができる方法を考え、実施することができた。
- ・試合前に円陣を組むなど、学年ごとに一丸となろうとする姿がみられた。
- ・他の学年の試合を見ながら、自分のことのように応援する様子が見られた。
- ・3年生の積極的な取り組みが下学年にも刺激を与え、他者への賞賛や相互に認め合う姿が年々増え、他の学校生活にも生かされている。

○今後の展開

- ・「生徒会主催による全校レクリエーション」は、後期（11月ごろ）にも実施する。
- ・学年の垣根を越えてチームを編制するなどして、異学年間での人間関係形成へもつなげていきたい。

◎ 研究主題 「様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすれば良いか。」

○ 研究副主題 「集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成」

1 学校の実態

本校は広野町出身の生徒と全国各地から集まった JFA アカデミーの生徒がおり、非常に多様な価値観をもった集団である。何事にも自主的・協働的に取り組む意識が高い生徒が多い一方で、自己表現に慎重な生徒も少なくない。どの生徒も、尊重し合える人間関係の構築が課題である。本年度の重点目標に「目標をもち 学び合い ともに成長しよう」を掲げ、現職教育では「協同的な学び」や「分からないことは訊く」ことができる主体的な生徒の育成を図っている。

2 研究実践

（1）スプリングレク

①日時：令和5年5月19日（金）1～4校時

②実施方法・内容

スプリングレク実行委員会（生徒会執行部・各学級代表）が企画し、人間まちがい探し・種目別リレー・ドッジボール・買い物ゲームを運営した。全校で縦割り班にし、教師も参加した。

③成果・課題

昨年度は「体育祭を実施したい」という生徒から声があり、今年度は時数を増やして実施した。また、生徒会執行部の負担を軽減し、多くの生徒の活躍の場を増やすため、実行委員会をたてた。実行委員会では、さまざまな生徒の実態（運動の得意・不得意）や必要な時間・準備物・説明についてアイデアを出し合い、企画の内容を考えることができ、リーダーシップを発揮する場となった。日頃、集団活動の中心にいるタイプではない生徒が人前に出て説明する場面が生まれ、多くの生徒の活躍の場となっていた。また、学年を越えて互いを応援し合う姿も見られた。感想用紙には多くの生徒が満足感を感じている振り返りが書かれていた。これらを実行委員にもフィードバックすることで、「スプリングレクだけでなく、サマーレクもしたい」「来年はもっとよりよいものに」という意欲の向上につながった。

【スプリングレクの様子】



(2) いじめゼロ運動・全校集会

①昨年度の成果・課題（教育計画より）

- いじめを認識しようとする意識が高まった。
- 実際に起きた事案をもとに、全校で話し合いの場を設け、課題や解決策を具体的に考えるなかで、被害にあった友達の気持ちを考えたり、いじめを防止しようとしたりする意識が高まった。
- 嫌がっている相手に対して、執拗に傷つける言葉を言ったり、態度をとったりする様子が見られた。
- いじめにつながる場面に当事者ではなく出会った場合、止めたり助けを求めたりすることができず、傍観者になってしまう姿が見られた。

②実施内容

意識調査・アンケートの実施

いじめに関する意識調査・昨年度から成長したことやいじめゼロにするための取り組みに関するアンケートを実施した。全学級が同じ時間に実施し、調査を始める前後には生徒会執行部からの「いじめゼロ運動」に関する説明をオンライン配信で行った。

学級会

アンケートの結果から、学級の実態を共有し、「学級スローガン」「いじめをゼロにするための取り組み」について話し合いを行った。

＊学級スローガンは学級内に掲示し、いじめをゼロにする取り組みを進めている。

全校集会

各学級の実態・学級スローガン・取り組みの発表、全校スローガンと取り組みについて検討した。生徒会執行部と規律委員会の委員長・副委員長が進行役を務め、各学級委員長が学級会の結果を発表したり、学級代表が全校集会についての感想を発表したりすることで、集団活動への参画の場を増やすことができた。

＊昨年度は実際に起きた「掲示板へのいたずら」を題材に、なぜ問題なのか・一人ひとりがどう認識しなければならないのかを生徒主体で考えることができた。

【全校集会の様子】



③成果・課題

個人・学級・全校生という段階を踏んだことで、学級・学年が同じ熱量をもって、いじめゼロ運動に取り組もうとする意欲を高まっている。全校のスローガンは「ZERO～仲良く 楽しく 安心を～」に決定し、いじめゼロ運動としてふわふわ言葉の推奨やGAT（グッドアクションツリー）の作成等を実施することが決定した。今後、ゼロ運動の取り組みと意識調査を継続する。

3 今後に向けて

2学期には「いじめゼロ運動全校集会」や文化祭「広蛸祭」、生徒会執行部立会演説・選挙など、集団活動に参画する場面が増えてくる。生徒がそれぞれの活動を自分事としてとらえ、課題や解決策を広く深く考え、よりよい集団の形成ができるよう指導していく。

【相双支部 研究内容】

- ・生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動
- ・教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を通して総括していく活動

1 イングリッシュデーの計画・実施について

1 目的

本校では、中学校3年生が修学旅行（探究活動の発信）としてニュージーランドへの海外研修を実施する。しかし、生徒には英語に対する苦手意識が強く、英語での発信に不安を抱えている生徒も多い。そこで、日常生活の中で英語の活用場面を増やすことで生徒の苦手意識を払拭し、英語を積極的に活用する態度を育てる。

2 生徒会役員の活動

『英語に日常的に触れる機会を増やす』という公約を生徒会執行部で掲げ、生徒会役員が中心となって活動を進めていった。

① イングリッシュデーを設定した場合に、どのようなことが実践できるかを協議。

- ・日常会話すべてを英語にする。 ・朝、昼の SHR を英語で実施。
- ・ALT の協力を仰ぎ、昼の放送を英語で行う。 ・週に1回実施。

② 英語科の先生方との意見交換・アドバイスをもらう。

- ・日常すべてを英語にすることは難しい。 ・全校生に強制力をもたせる必要はないのでは。
- ・英語で話す機会を増やし、挑戦してみようという雰囲気づくりをテーマにすべきでは。
- ・英語科の先生方に英語で積極的に話しかけてみては。

③ ②を参考に、SHR の原稿の作成。ALT や先生方の添削を受け、R4 6 月上旬に第 1 回を実施。

- ・朝のあいさつを積極的に英語で行う。 ・教員も巻き込み学校全体の取り組みとして実施。
- ・イングリッシュデーの告知として、ホワイトボードでの連絡。チラシの作成・掲示、SHR での呼びかけを生徒会が中心となり実施。

④ 放送委員会が中心となり生徒会役員と連携しながら、昼の放送原稿を作成。

- ・昼の献立を英語で説明する機会を設けた。

⑤ 英語に触れる機会の確保をテーマに、廊下にイングリッシュデーホワイトボードを設置。

- ・学年によるゲーム形式として、英語をたくさんホワイトボードに書いてもらう機会を確保。

3 実践を通して

R4 年度に毎週水曜日をイングリッシュデーとして固定化し実施したが、マンネリ化が発生したことで現在活動休止中。新しい生徒会役員の公約として、昨年度の内容を踏まえながら実施方法を検討中。R5 9 月に NZ から生徒がホームステイ予定のため、それらに合わせて開催を検討中。一人一人が自分事として英語に触れる機会を増やすためにはどうすればよいか、生徒会役員を中心に現在模索している。



2 応援委員会による壮行会の実施

1 目的

部活動や各種大会で活躍する生徒を応援する場を設定することで、それぞれの活動について知るきっかけをもつこと。また、応援委員会の活動の場を設定し、生徒間で励まし合う雰囲気を醸成すること。

中学校が開校して5年目であるが、コロナ禍もあり、中学全学年がそろって対面で行う壮行会は実施できていなかった。全国大会で活躍するバドミントン部・レスリング部・特設ディベート部等の活動があまり全体で共有できておらず、全校生で応援する機会を明確にもたせた。

2 応援委員会の活動

① 活動計画・目標の決定。対面で行う初めての壮行会にて、応援をどうするか。

- ・応援動画を作成してはどうか。 ・全校生で応援ソングを歌ってはどうか。
- ・お昼の放送で放送委員会とコラボし、曲を流してもらうのはどうか。
- ・実際に応援団長を中心として、新しい振り付けで応援できるようにしてはどうか。

② 応援練習の開始。本番1回目（5/10 陸上地区大会壮行会）を終えて。

- ・初めての応援で声が小さくなってしまった。 ・全校生への説明が難しく、そろわなかった。
- ・自分たちの応援そのものに自信がなく、うまくいかなかった。
- ・終了後すぐに生徒のみで反省会を実施し、次回の壮行会に向けて反省点を出し合った。

③ 本番2回目（6/1 地区中体連・陸上県大会・レスリング部全国大会壮行会）

- ・前回よりもスムーズにできるようになったが、まだ声が出せるのではないかな。
- ・全校生により大きな声、フリをしてもらうには、応援委員の配置も工夫するべきではないかな。

④ 本番3回目（7/14 県大会・特設ディベート部東北大会壮行会）

- ・全国大会につながる夏休み前の壮行会として、今までで一番いいものになった。
- ・夏休み明けに駅伝大会壮行会もあるため、そこに向けてよりどんな工夫をしていけばよいか。

3 実践を通して

過去にはオンラインで形式的に行った壮行会があるが、対面で全校生を巻き込んでの壮行会は開校以来中学校では初めてのものとなった。生徒たち自身のやりたい応援を実現していく中で、よりどんな点を工夫すればよりよい応援になるのかを、応援委員会で対話・実践を通して深めていった。一貫校である高校では別に応援委員会が存在し、別の形での応援があるため、今後はより質の高い応援を目指していくとともに、高校と混ざって活動していく視点も必要になってくる。



ふたば未来学園中学校は、一人一人のリーダー性や能力は他校よりも高い。生徒たちから挙がった声を大切に、様々な集団活動を行っていき、振り返りと改善までをセットで行っていきようにしていきたい。

【ふたば未来学園中学校 教育目標】

新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、グローバルな視点でこれまでの価値観、社会のあり方を見直し、地域や世界を舞台にして、自らを変革し、社会を変革していく「変革者」を育成する。

1 研究主題・副主題

『様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、よりよい社会を目指す生徒を育む指導はどうすればよいか。』

「集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成」（2年次）

2 研究の内容・方法

【内容】

- （1）生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動
- （2）教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動

本校実践

【方法】

- （1）各学校の集団の実態に基づき研究内容の明確化を図り、集団を高めるための実践研究を行う。
- （2）様々な人間関係形成のスキルを活用し、よりよい人間関係を構築するためのコミュニケーション能力の向上に努める。

3 実践

本校は義務教育学校開校4年目。

前期課程児童（1～6年生57名）、後期課程生徒（7～9年生25名）が一つの校舎で生活している。

方法（1）集団を高めるための実践

自分たちが属する集団の現状を、時間をかけて分析・客観視することで、課題を自分事としてとらえ、よりよい集団になるよう解決方法を考えようとする態度を養う。

【問題の発見・確認、議題の設定】

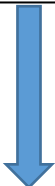
4月の児童生徒会本部・代表委員会の集まりにて、自分たちがおかれている学校生活の現状分析を行う。

○良い点

- ①後期課程では、各学年の教室が隣り合っていることで休み時間の行き来があったり、合同で保健体育の授業を行ったりしているので他学年との交流の機会がある。
- ②少人数であるので、一人の意見を全体で共有しやすい。
- ③前期課程の行事に、後期課程も参加している。（七夕集会で、短冊に願いを書く。豆まき集会で、鬼のイラストを描く。など）

●課題

- ①村外からのバス通学がほとんどである。登下校のバス時間により、朝・放課後の活動に制限がある。加えて、放課後、学校や地域での外遊びができないので、児童生徒同士の学校外での交流が少ない。
- ②他校生との交流が少なく、学校生活全般を他校と比較できず、新しい提案があがりにくい。



【解決に向けての話し合い】

(課題①について)

- ・どのような活動ができるか？
→長縄とび、鬼ごっこ、ドッジボール、トランプなど
- ・どのくらいの時間で行うか？
→授業時間（45～50分）、業間や昼休み（20分）

【解決に向けての話し合い】

(課題②について)

- ・他校と比較することは可能なのか？
- ・自分たちで解決するための一歩があるとするならば、それはどのようなものか？

方法（2）コミュニケーション能力の向上
話し合い活動において、

- ・代表生徒がコーディネーター役となること
- ・他者の意見を否定しないこと
- ・意見がある場合は解決も提案することなどをそれぞれに意識させる。

昨年度の研究の視点②教師の働きかけの工夫

意図的な言葉かけ（どのような言葉を、どのようなタイミングでかけるか）によって、この計画が集団全体の立場にたっているか考えさせる。

- ・どのような子どもたちが集まって交流するのか。
→年齢・体格が違う。特別支援学級の子どももいる。
- ・体を動かすこと以外に交流する方法はないのか。
→運動が苦手な子どもも参加できるもの。
- ・本部と代表委員で計画・準備が可能なのか。
→やりたいこととできること。見通しをもって計画する。

【解決方法の決定・実践】（課題①について）

「学園〇×クイズ」

- ・実施案の作成（図1）
教師が実際に会議で使う「△△△実施案」を参考に、目的、期日、日程、係分担、会場図などをまとめる。
- ・学園に関する問題の作成（図2・3）
校内の写真+問題文 → 提示用スライド作成（図4）
- ・校長への提案（図5）
- ・係分担とリハーサル
- ・実施（9月上旬予定）

【解決方法の決定・実践】（課題②について）

「目安箱の設置」

- ・児童生徒の意見や提案を聞く方法として目安箱を設置する。

昨年度の研究の視点②教師の働きかけの工夫
技術科での木工学習を活かして、箱を製作する。（図6）

方法（2）コミュニケーション能力の向上

作成した実施案をもとに、校長にプレゼンテーションする。他者からの意見やアドバイスに返答する。

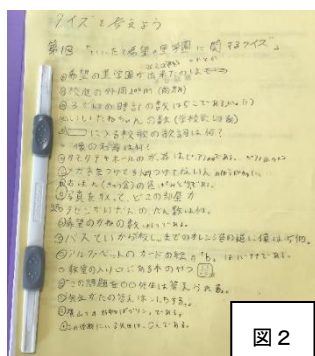


図2



図3



図5

【振り返り】

- ・実施後のアンケート（図7）
→どのようなアンケート項目であれば適切に評価・改善できるか、生徒に考えさせる。

【前期後期 交流会 アンケート】 学年（ ）年

9月6日（火）の前期後期交流会にご参加いただき、ありがとうございました。今後の活動の改善のため、アンケートにご協力ください。

(1) 交流会は楽しかったですか？（○をつけてください）

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

(2) クイズは楽しかったですか？（○をつけてください）

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

(3) 交流会で、良かったところ、直してほしいところなどがあれば書いてください。

(4) 次の交流会の内容で、アイデアがあれば教えてください。

図 7



図 6

前期・後期の交流会 実施案	1 目的 児童と生徒の交流をすることで、互いを知り仲を深める。	2 内容 まるばつクイズ	3 場所 第一体育館
4 対象 全学年	5 日時 9月6日（火） 昼休み	6 日程 13:15 給食片付けなど終了 13:20 集合完了・説明 13:25 クイズ開始 13:40 終了 13:45 5校時開始	7 服装 制服・運動着どちらでも可
8 その他 (1)担任の先生方へのお願い ・学級の児童生徒を紅・白2つに分けてください。 ・児童は、紅白帽をかぶってください。 ・生徒は、体育館でピスを渡すので着てください。	8 その他 (2)係分担 ・進行：Aくん ・パソコン操作：Bさん ・ロープ：Cくん、Dくん ・点数：Eさん（紅） Fくん（白）		

図 1

この写真は1年生教室である。



このマークは、家庭科室である



図 4

4 現時点での成果と課題

- 昨年度実施できなかった「自校の分析」を行ったことで、課題が明確になり、解決までの見通しをもつことができた。
- 計画を一から考え、吟味し、活動させることで、「決められた計画を正しく実行する」だけでは得られない、責任感や充実感が活動中の言動からうかがえた。「学校行事を創り上げていく主体者」という意識が高まった。
- 目安箱で得られた提案を、今後どのように取り上げていくのか。

令和5年度 福島県中学校教育研究会相双支部 第一次研究協議会 特別活動部会 提出資料

理念



- 幼児期の「あそび（内発的関心・問いからの没頭）」の力を伸ばし、学校の「学び」も教材を受動的に学ぶのではない内発的な「探究」へと転換させる。
- 社会情動スキルの基盤を形作る幼児期から青年期まで一貫した理念としたカリキュラム
- 0歳からのかけがえのない個が集い、共感・協働し、多様性を力に変える

環境 (時空間)



エリアの間を壁で分けることなく、わくわく本の広場を中心にしながら子ども達が自由に学びをデザインできる環境づくり。
多様な年齢の子ども達の自然な関わりを引き出す意図的な環境をデザイン。

園児・児童・生徒の交流

- 異学年合同の学び
- リーダーの育成
- 多様性



教員同士の連携

- 教職員・生徒合同の職員研修
- GoogleChatでの情報共有
- 保育・授業の相互乗り入れ



【研究の視点】

研究の視点 ※相双支部研究推進計画より

- 1 生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫
- 2 教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫
- 3 集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫

【研究実践】

- 1 生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫

○多様な子どもたちの交流の機会を数多く作り出したことによって、生徒たちの他者理解の資質・能力が身に付いた。

○子どもから大人まであらゆる他者との交流の機会を重ねるに連れ、場に応じた行動や言葉使いを身に付け、協働的に活動することができるようになった。

- 2 教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫

○生徒・教員が合同で研修を行い、現在の学校の環境や社会について現状分析を行い、課題解決に向けて話し合いの場を設定した。生徒達は教員たちとともに分析する活動を通して新たな視点を持ち、思考している様子がみられた。

- 3 集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫

○前期生（小学校段階）との話し合いの場を作りだし繰り返し活動を行う中で、積極的に意見を引き出す、まとめるなど、課題解決に向けてリーダーシップを発揮することができるようになった。

【研究主題】

様々な集団活動に自主的・協働的に取り組み、集団や個人の課題を解決し、より良い社会を目指す生徒を育むにはどうすれば良いか。

【研究副主題】

集団活動への参画を通して、課題を解決する力の育成

【相双支部研究の視点】

- ① 生徒一人一人が集団の一員として行動し、集団の一人一人のよさを実感させる活動の工夫
- ② 教師だけでなく生徒と共に所属する集団の現状分析を行い、その中から、集団の課題を発見し、課題解決を目的とした集団活動を作り上げ、実践を総括していく活動の工夫
- ③ 集団活動を通して、リーダー候補をリーダーとなるように育てていく指導者の働きかけの工夫

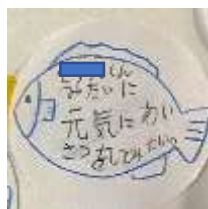
1 本校の実態

本校は前期課程（小学校課程）42名、後期課程（中学校課程）22名の児童生徒が在籍する義務教育学校である。同じ校舎内で小・中学生と一緒に生活しており、その良さを活かして、1～9年生を混ぜた縦割り班活動や、5～9年生で組織された生徒会・委員会活動など、特色ある教育活動を行なっている。特に生徒会・委員会活動は後期生が中心となって、学校内の課題解決に向けた取り組みや、全校生が交流できるイベントなどの企画を行なっている。こうした異学年交流を通して、自然と上学年が下学年のサポートをしたり、一緒に遊んだりする姿が学校生活の様々な場面で見られるのも本校の特色の一つである。

2 本校の取り組み

【研究視点①】 一人一人の良さを見つける「Happy Sea」

昨年度より指定を受けている人権教育研究の一環でもあるが、一人一人の良さを書いて貼り付ける Happy Sea と呼ばれる活動を行なっている。前期児童・後期生徒が行き交う前期校舎の廊下の壁一面に、大きな海を描いた模造紙を貼り付け、海の生き物が書かれたカードに日常で友達からされたり、いわれたりして嬉しかったことなどを書いて貼っていく取り組みである。カードは、たこ（うれしかったこと）、鯛（まねしてみたいこと）、貝（温かい言葉）の3種類で、それぞれのテーマに合わせて書いた後、海の模造紙に自由に貼り付け、Happy Sea を作っていく。



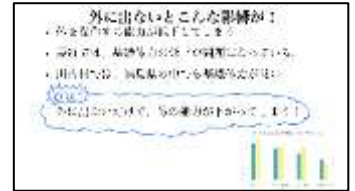
【研究視点②】 中央委員会による体力向上の取り組み

5～9年生の学級委員長で組織される中央委員会は、生徒会本部のサブ的な役割として、学校の諸問題解決に向けた取り組みを話し合い、活動している。生徒会では、「あいさつの改善」や「全学年の交流」について主として取り組んでいることから、中央委員会では他の課題に目を向け活動しようと話し合いを進めた。その際に、「県平均よりも体力テストの結果が悪い」「外遊びをする人が少なくなった（特に後期課程）」といった課題が上がり、外にでる人を増やすこと、児童生徒の体力の向上のためにどのようなことが

できるかを話し合い実践しているところである。

例1) 外遊びの良さについての啓発

後期生徒を中心に、外遊びの良さ（自律神経や身体機能を良くする、5感を刺激しストレスの解消につながる、日光に当たることでビタミンDを生成するなど）についてスライドにまとめ、給食の時間に3分間程度のプレゼンテーションの形式で、積極的に外に出よう、全校児童生徒に呼びかけを行った。



例2) 持久力UPのためのRunRunタイムの企画

後期生徒の持久力UPを目標に、村の一大イベントでもある「川内マラソン」で中学生が走る距離である3kmを2日間かけて（1日1.5km）、昼休みにみんなで走るという取り組みを行った。走る際には、気分が上がるように、BGMをかけながら行った。曲については事前にアンケートを実施し、その中からランダムに流した。今後も縄跳びなどの企画を考えており、継続して課題を話し合い、活動を行なっていく。

【研究視点③】 生徒会による全校生交流イベントの企画

1～9年生がもっと仲良く交流できる機会を作りたいという要望から、生徒会が主となって、1～9年生が縦割り班で行う球技大会を開催した。

生徒会の生徒5名が昼休みや放課後の時間を使って話し合いを進め、行いたい種目についてアンケートを実施し、前期児童が安全に楽しく遊べるための配慮事項や、後期課程生の特別ルールなどを考え、案を形にしていっていった。その際、教師は相談役として、話し合いを見守りながら、これまでの経験等を話すなどして助言を行った。当日の運営や準備についても生徒会が全て行い、球技大会を行うことができた。

昨年度までにも、同じように全校児童生徒で行うレクリエーションの機会があったが、教師側で準備することが多く、今年度は子どもたちが主体となって動けるような体制をとった。今後も秋に1～9年生で行う芋煮会などを予定している。



3 成果と課題

○成果

- ・生徒会、専門委員会の活動を通して、教師も子どもたちの話し合いに加わりながら、一緒に学校の課題や解決策について話し合うことができた。今後もこのような体制で、よりよい学校・集団づくりをめざして参画意識を高めながら、子どもが主体となる自主的・協働的な取り組みを大切にしていきたい。
- ・後期課程とりわけ8・9年生は学校の中心となって、学校全体のことを考え意見を提案したり、話し合いの司会進行をしたり、縦割り班や委員会リーダーとして下級生をまとめたりする機会が多く、リーダーとしての資質を育む機会を多く設けることができた。

●課題

- ・レクリエーション活動での子どもたちの姿をみるとリーダーとしての資質が育っていると感じるが、その前段階である話し合いの時間には、リーダーを中心として活発な意見交換をするということに慣れていない生徒も多く、自主的な話し合い活動の参画に課題がみられた。リーダーを中心とした話し合いを日頃の教育活動に取り入れ、良きリーダーを育てるとともに、フォロワーとなる生徒が安心して意見を出し合い、自分事として活動に参画できるような雰囲気づくりを今後も継続して行っていきたい。